

【修士論文要旨】

十五世紀における守護・国人の権力構造とその展開 —遠江国を中心に—

内 藤 剛 暉*

本研究は、十五世紀から十六世紀初頭における遠江国の守護・守護代・在地領主について、その政治的動向を明らかにし、歴史的意義を考察したものである。遠江の長禄・寛正年間の兵乱は、従来、地方の一紛争としか見られていなかった。しかし、近年、守護斯波義敏と守護代甲斐氏との抗争が指摘されるようになった。筆者は、遠江においてもこの対立構造に含まれていることを明らかにした。また、以上の時期は將軍義政の鎌倉府討伐（関東出兵）の時期とも重なり、東西間で非常に緊張状態にあった。この点を含めて遠江の情勢を検討することで、他の斯波分国越前や尾張とは異なる遠江独自の特色を明らかにした。

第一章では、守護被官、在地領主の動向を考察した。先行研究では、単に寛正六年（1465）に狩野介等に御料所を預け置かれたことのみが指摘されていたが、本研究で明らかにした、御料所を預け置かれた意義とは、反幕府の最大勢力狩野氏の調略が義政の関東出兵には必須条件であったこと、そして、長禄年間の義政の関東出兵構想（鎌倉府討伐）が寛正年間、およびそれ以降も継続していたことである。【史料1】

第二章では、長禄・寛正年間（1457～1466）に遠江で発生した今川治部少輔の反乱について考察した。従来、今川治部少輔の反乱は反幕府・反守護としての性格が指摘されていた。しかし、反乱勢力の中には斯波義敏方の被官も参加していたと思われる。これは、前年から続く義敏と守護代甲斐氏の対立が、遠江にも波及したものであったことを明らかにした。この時、義敏方として活動した勢力が、応仁・文明の乱時にも東軍として義敏に付き従った。応仁・文明の乱時の派閥は、すでに長禄年間より遠江において確認できることを明らかにした。【史料2】

第三章では、文正の政変以降の遠江について論じた。従来、文明年間以降は単に幕府・守護斯波氏と駿河今川氏の領国紛争と見られていたが、本研究では、在地勢力の動向に注目し、改めて駿河今川氏の遠江侵攻によって、文明年間までに形成された斯波氏と在地領主の関係が破綻し、駿河今川氏と在地領主による新たな関係の構築が始まったことを論じた。その中でも、駿河今川氏方に従った遠江本間氏の動向を探った。本間氏は奉公衆に準じる存在であったことを究明し、他の奉公衆勝間田・横地氏とは異なる動向を確認した。勝間田・横地氏は駿河今川氏と敵対する。このことから、本来、幕府に付き従う奉公衆のような勢力においても、この時期には、幕府・守護斯波氏に味方する勢力と、遠江に新たな勢力を構築しようとする駿河今川氏に味方する勢力と

*国際人類学研究科 博士前期課程

に二分されていたことを明らかにした。【史料3】

このように、遠江の各勢力（遠江守護・遠江守護代・在地勢力）の動向には、各々の思惑のみならず、越前および尾張の斯波氏、甲斐氏の動向、将軍、鎌倉・古河公方の各派閥の意向が強く影響していたことを明らかにした。当該期の斯波氏と甲斐氏、幕府と鎌倉府の対立構造に挟まれ、鎌倉府のある関東・東国に近いという遠江の立地状況が、在地社会に大きく影響を及ぼしていたことを、当地域の特色として論じた。

史料

【史料1】『満濟准后日記』永享6年12月16日条（『静岡県史 資料編6 中世2』、878頁）

十六日、晴、管領来臨、駿河狩野介・興津以下相_{（細川持之）}関東_{（悪）}、本間ト大森ト兩人方へ、狩野・三浦・進藤以下、以_{（今川範忠）}連署_{（今川範忠）}申_{（今川範忠）}遣使者僧_{（今川範忠）}、於_{（今川範忠）}伊豆国_{（今川範忠）}駿河守護被官者行逢、不事問召取、罷_{（今川範忠）}帰_{（今川範忠）}駿河_{（今川範忠）}了、仍彼連署状以下写_{（今川範忠）}之、去十四日到来了、此事可_{（今川範忠）}達_{（今川範忠）}上聞_{（今川範忠）}条、可_{（今川範忠）}為_{（今川範忠）}何様_{（今川範忠）}哉之由、旁不_{（今川範忠）}可_{（今川範忠）}然旨、種々談合子細在_{（今川範忠）}之、為_{（今川範忠）}此云々、

この史料の記述は、将軍足利義教の側近満濟によるもので、幕府（義教）の支持する駿河守護今川範忠と関東方（鎌倉公方足利持氏）が支持する狩野氏等の対立が見て取れる。上杉禅秀の乱（応永23年、1416年）以降、幕府と鎌倉府の対立は、より一層激化していた。

【史料2】『経覚私要鈔』（『史料纂集』による。）文正元年9月11日条

（前略）

一楠葉新右衛門尉元次午剋下着了、京都事此間風聞同篇也、但於_{（山名）}伊勢守_{（山名）}者遠江国没落、右兵衛佐義俊同篇云々、

（後略）

史料によると、斯波義敏は、文正の政変後、伊勢守（伊勢貞親）とともに遠江へと落ち延びている。没落先として遠江を選んだ理由は、長祿・寛正年間に作り上げた親義敏派勢力を頼ったためと考えられる。

【史料3】「柴豊宗等連書請文」（「宝鏡寺文書」、『静岡県史 資料編7 中世3』、16頁）

畏言上、抑御料所遠江国浅羽庄事、今度就被_{（山名郡）}成_{（山名郡）}下召符_{（山名郡）}致_{（山名郡）}参洛_{（山名郡）}、先規在様具令_{（山名郡）}言上_{（山名郡）}候了、然間当庄之事、為_{（山名郡）}南御所様御直務_{（山名郡）}、年貢諸公事以下、於_{（山名郡）}御番衆三人中_{（山名郡）}、可_{（山名郡）}致取沙_{（山名郡）}之由、任下被_{（山名郡）}仰出_{（山名郡）}之旨上、如_{（山名郡）}先規_{（山名郡）}嚴重可_{（山名郡）}致二其沙汰_{（山名郡）}、聊有_{（山名郡）}不法懈怠之義_{（山名郡）}者、一段可_{（山名郡）}預_{（山名郡）}御罪科_{（山名郡）}者也、仍言上如_{（山名郡）}件、

文明十四年寅壬八月廿三日

（渋谷右京亮）
親重（花押）

（本間中務丞）
季能（花押）

(榮兵衛助)

豊宗 (花押)

進上 南御所様御奉行所

本間・渋谷・柴は、ともに遠江国にて勢力を保っていた在地勢力で、南御所領（足利義政娘聖俊領）の代官職を請け負っている。南御所（比丘尼御所）は、将軍家との密接な関係を持っており、現地の管理には奉公衆があてられることが多かった。【史料3】には、本間氏等3人が上洛し、「先規在様具令言上候了」していることから、本間氏は、断定はできないまでも、奉公衆に近い存在として位置づけができる。

参考文献

- 秋本太二「遠江に於ける守護領国制の推移 ―とくに遠江今川氏の没落を中心として―」（『地方史静岡』第二号 地方史静岡刊行会 1972年）
- 同「今川氏親の遠江経略 ―とくに信濃小笠原氏と関連して―」（有光有學編「戦国大名論集11 今川氏の研究」吉川弘文館、1984年、初出1974年）
- 網野善彦・石井進・稲垣泰彦・永原慶二編『講座日本荘園史5 東北・関東・東海地方の荘園』吉川弘文館、1990年
- 有光有學『今川義元』吉川弘文館、2008年
- 家永達嗣『室町幕府将軍権力の研究』東京大学日本史学研究室、1995年
- 同「伊勢宗瑞（北条早雲）の出自について」（『シリーズ・中世関東武士の研究 第10巻 伊勢宗瑞』戎光祥出版 2013年 初出『成城大学短期大学部紀要』29号、1998年）
- 同「伊勢盛時（宗瑞）の父盛定について」（『学習院史学』38、2000年）
- 同「足利義視と文正元年の政変」（『学習院大学文学部研究年報』61、2014年）
- 石田晴男『戦争の日本史9 応仁文明の乱』吉川弘文館、2008年
- 伊藤俊一『室町期荘園制の研究』塙書房、2010年
- 大石泰史『井伊氏サバイバル五〇〇年』星海社、2016年
- 大塚勲『今川氏と遠江・駿河の中世』岩田書院、2008年
- 大藪海『室町幕府と地域権力』吉川弘文館、2013年
- 小川信『足利一門守護発展史の研究』吉川弘文館、1980年）
- 小木早苗「今川氏の遠江支配」（今川氏研究会編『駿河の今川氏 第四集』谷島屋 1979年）
- 小和田哲男『今川氏家臣団の研究』清文堂出版、2001年
- 同『争乱の地域史 西遠江を中心に』清文堂、2001年
- 同『武将たちと駿河・遠江』清文堂、2001年
- 川添昭二『今川了俊』吉川弘文館、1964年
- 河村昭一「守護斯波氏の遠江国支配機構」（『兵庫教育大学研究紀要』第2分冊、2002年）
- 木下聡「総論 斯波氏の動向と系譜」（『シリーズ・室町幕府の研究 第一巻 管領斯波氏』戎光祥出版 2015年）
- 久保田昌希『戦国大名今川氏と領国支配』吉川弘文館、2005年
- 小泉義博「斯波氏三代考」（『シリーズ・室町幕府の研究 第一巻 管領斯波氏』戎光祥出版 2015年 初出「一乗谷史学」六 1974年）

呉座勇一『応仁の乱』中公新書、2016年

佐藤進一「幕府論」（『日本中世史論集』岩波書店 1990年、初出『新日本史講座』（中央公論社 1949年）

同「室町幕府論」（『日本中世史論集』岩波書店 1990年、初出『岩波講座日本歴史』岩波書店 1963年）

同『室町幕府守護制度の研究 上 南北朝期諸国守護沿革考証編』東京大学出版会、1967年

下村信博「守護斯波氏の失墜」（『シリーズ・室町幕府の研究 第一巻 管領斯波氏』戎光祥出版 2015年 初出『新修名古屋市史第二巻』1998年）

鈴木将典『国衆の戦国史 遠江の百年戦争と「地域領主」の興亡』洋泉社、2017年

瀬戸祐規「『大乘院寺社雑寺記』『文正記』に見る長祿・寛正の内訌」（『シリーズ・室町幕府の研究 第一巻 管領斯波氏』戎光祥出版 2015年 初出 大乘院寺社雑寺記研究会編『大乘院寺社雑寺記研究論集第三巻』和泉書店 2006年）

谷口雄太「戦国期斯波氏の基礎的考察」（『年報中世史研究』三九 2014年）

福田豊彦『室町幕府と国人一揆』吉川弘文館、1995年

星川礼応「駿遠両国における今川了俊・仲秋とその子孫」（『日本歴史』820号 2016年）

松島周一「室町中期の遠江国蒲御厨をめぐる甲斐氏と吉良氏」（『日本文化論叢』二一 2013年）

峰岸純夫『享徳の乱 中世東国の「三十年戦争」』講談社、2017年

百瀬今朝雄「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』7 1976年）

山田徹「足利将軍家の荘園制の基盤—「御料所」の再検討—」（『史学雑誌』九月号 2014年）

湯浅治久「室町期駿河・遠江の政治的位置と荘園制—都鄙間交渉史の視点から—」（阿部 猛編『中世政治史の研究』日本史史料研究会 企画部、2010年）

『袋井市史 通史編』袋井市、1983年

『引佐町史 上巻』引佐町、1991年

『磐田市史 通史編上巻 原始・古代・中世』磐田市、1993年

『福井県史 通史編2 中世』福井県、1994年

『森町史 通史編 上巻』森町、1996年

『掛川市史 上巻』掛川市、1997年

『静岡県史 通史編2 中世』静岡県、1997年